

株元に着果、労力減

農研機構・メーカー カボチャ品種育成

農研機構と種苗メーカーの朝日アグリア（東京都豊島区）は、良食味で作業の軽労化が期待できるカボチャの新品種「豊朝交（ほうちょうこう）1号」を育成した。株元から70センチ付近までに着果する株元着果性があり、果実がつく場所が安定していることから、整枝、収穫作業の省力化につながるとしている。



良食味で作りやすいカボチャ「豊朝交1号」（朝日アグリア提供）

西洋カボチャ品種の多くは着果位置が安定せず、つるの誘引など整枝作業や、収穫適期の果実の見極めに労力がかかる他、収穫時期には茎葉が繁茂し果実が探しにくくなる。農研機構と同社は、葉が生える節と節の間が短く、着果位置が安定し、かつ良食味の品種の育成を目指した。「豊朝交1号」は株

元着果率が80・4%と、既存品種の「えびす」（6・3%）などに比べて大幅に高い。果皮は濃い緑色、果肉は濃い黄色で厚い。果肉は粉質系でホクホク感がある。

北海道から西南暖地まで広い地域で栽培できるとみている。同社は「栗のめぐみ1号」の商品名で種子の販売を始めた。開発が進められている機械収穫体系にも向く品種とみている。